

研究プロジェクト「グローバリゼーションと市民社会」  
Research Project: Globalization and the Civil Society

実施期間： 2006～2009 年度

Term of the Project: 2006-2009 fiscal years

研究代表者： 仁科 一彦 大阪大学大学院経済学研究科教授

Project Leader: Dr. Kazuhiko NISHINA, Project Representative on the IIAS Planning Board;  
Professor, Graduate School of Economics, Osaka University

研究目的：

いわゆるグローバリゼーションの進展によって、文化や人々の価値観をはじめとする社会生活のさまざまな側面が影響を受け、変貌することは否定できない。本プロジェクトの目的は「グローバリゼーションと市民社会」のテーマのもとに、市民社会に生じると考えられる変化を検討することである。それらの変化は本質的に多様であるから、経済学や政治学等の単一の研究領域にのみに基づいた検討では不十分であると思われる。また、欧米を中心にして急激に増加してきた先行研究においても、検討課題について広範な合意が成立しているとは言えず、ましてや、検討のアプローチや方法論が確立しているわけではない。したがって、本プロジェクトでは、グローバリゼーションに関わる問題の所在を、複数の研究領域にもとづいて明らかにすることから始めなくてはならない。

さらに、多様な事象を複数のアプローチから検討することが意味を持つためには、単に事象を羅列するのではなく、論理的な分析の方向性を示すことが必要である。たとえば、はたして グローバル・スタンダード(Global standard)と呼べるような制度や習慣は存在するのか、グローバリゼーションの一層の進展が世界をそのような方向に修練させるのか、それは望ましいと評価できるのか、等の議論を積み重ねていくことも考えられる。最も基本的な制度である民主主義や資本主義も。こうした問いから外れるものではないであろう。そのような可能性も含めて、研究の方向を探っていく計画である。

Objectives:

There is no doubt that the dynamics of globalization have significant effects on the cultural interaction, the values systems and the social behavior of individual citizens. This research project is aimed at examining the forces of globalization and their impact as far as modern civil societies are concerned. The concept of civil society is not confined to the third sector non-profit and non-government organizations, but it is reflective of the more encompassing socioeconomic and political life of individuals and groupings. The proper assessment of the multi-faceted features of globalization and its socio-economic and socio-political effects is arguably beyond the reach of analytical approaches based exclusively on either as economics, social technological or political science. There is indeed, no general consensus on the definition of the phenomenon even within the fast-growing Western-centered literature, nor is there an unequivocal methodology to for the examination of its impact.

Thus, this project constitutes an initial attempt to explore important questions raised by globalization by integrating distinct but complementary research perspectives. It is essential for this multi-disciplinary approach to focus beyond the descriptive analysis and provide a critical

assessment of trends and cycles. The plan of this research is designed to pursue a better understanding and clarity of conceptual issues such as whether the so-called system of Global Standard exists, and whether globalization as a process is conducive to a faster convergence toward a single universal standard. The focus is also made on the evaluation of whether the globalization forces driving civil societies, given their inherent benefits and risks, are shaping the socioeconomic and political life toward desirable outcomes.

キーワード: グローバリゼーション、学際的アプローチ、多次元評価

Key Word: globalization, interdisciplinary approach, multi-dimensional evaluation

参加研究者リスト: 9名 (◎研究代表者)

〈分野〉	氏名	職名等
〈経済学〉◎	仁科 一彦	大阪大学大学院経済学研究科教授
	猪木 武徳	国際日本文化研究センター所長・教授
	谷川 寧彦	早稲田大学大学院商学研究科教授
	ナビル マグレビ	和歌山大学経済学部教授
〈法学〉	吉本 健一	大阪大学大学院高等司法研究科教授
〈政治学〉	河田 潤一	大阪大学大学院法学研究科教授
	小川 有美	立教大学法学部教授
〈歴史学〉	杉原 薫	京都大学東南アジア研究所教授
〈社会学〉	川北 稔	国際高等研究所副所長／京都産業大学客員教授／大阪大学名誉教授

研究活動実績 :

2006年度 :

2006年度は、研究代表者他がプロジェクトに関する先行研究の調査を実施した。その一つは欧米の研究成果を整理し、次年度からの研究方向を探った。他には、イスラムの経済と文化について、重要な検討事項をまとめるための検討を行った。

第1回の研究会は2006年11月17日と18日に高等研で実施した。参加者は、プロジェクト参加者全員である。報告は、

1. 仁科 一彦 「グローバリゼーションと市民社会」
2. Nabil Maghrebi “New Perspectives on the Implications of Globalization For Civil Society and Human Civilization”

の2件である。それぞれに関して活発な質疑応答をおこない、さらなる進展に寄与できたものとする。

研究会開催実績 :

第1回: 2006年11月17日～18日 (於: 高等研)

2007年度 :

本年度に開催した2回の研究会では、4本の研究発表を得た。

1. 谷川寧彦 「グローバリゼーションの不均一性」
2. 河田潤一 「メンバーシップからシンボリックアナリストへ—nation of joiners の憂鬱」
3. 吉本健一 「グローバリゼーションと法制度」
4. 小川有美 「グローバリゼーション時代の人の移動と政治—ヨーロッパは要塞か」

それぞれ本プロジェクトの根幹をなすテーマについて、企業金融論、政治学、会社法およびEU研究の

分野からの分析であり、グローバリゼーションの本質を探り、市民社会への影響を学際的に議論するための軌道を敷いたものと言える。本プロジェクトが目指す、「異分野からの刺激と知恵を受けた本格的な分析」に着実に近づいていると考えられる。

研究会開催実績：

第1回： 2007年6月22日～23日（於：高等研）

第2回： 2008年3月21日～22日（於：高等研）

2008年度：

2008年度の第1回研究会は、12月12日と13日に開催した。報告は

1. 猪木武徳 「グローバリゼーションと大学」
2. 杉原 薫 「グローバリゼーション時代のアジア・アフリカ貿易」

である。

前者は研究と教育をになう大学の活動をグローバリゼーションの進展とともに考察している。後者はオーソドックスな歴史分析であり、特にグローバリゼーションが顕著になった近代から現代の世界経済の動向を分析している。

2008年度の第2回研究会は2月13日と14日に開催した。報告は

1. 仁科 一彦「金融危機とグローバリゼーション」
2. Nabil Maghrebi “Perspectives on financial crises and economic globalization”

である。

前者は金融・資本市場におけるグローバリゼーションを理論的に検討して、資本移動の経済厚生の意義を再確認している。そのうえで今回の金融危機に関する綿密な分析を展開し、危機に関する通説の多くが誤りであることを指摘している。

後者も同様に危機とグローバリゼーションの関係を考察したものである。特筆すべきは、グローバリゼーションの経済的意義を経済発展にまで関連づけて評価していることであり、この視点が、14世紀のイスラム学者I. Khardun によって指摘されている事実を発見していることである。

総じて本年度の研究発表は、グローバリゼーションに関するいわゆる通説の多くが、現象にとらわれた拙劣な議論であることを指摘して、これから精密な議論を展開する方向を示している点が高く評価されるのではなかろうか。

研究会開催実績：

第1回： 2008年12月12日～13日（於：高等研）

第2回： 2009年2月13日～14日（於：高等研）

2009年度：

2009年は本プロジェクトの最終年度であり、これまで培ってきた情報を整理し、メンバーの主張や分析を討論の形で展開した

報告は、谷川「アイスランドの金融危機」と小川「グローバリゼーションと都市」であり、グローバリゼーションに関連して、それぞれの分野における最新のテーマを紹介した。とりわけ金融危機は本プロジェクトの遂行期間中に生じたものであり、グローバリゼーションと密接に関わる問題であるとして頻繁に言及されてきた。しかし研究会の討論を経て、金融危機がグローバリゼーションによってもたらされたという指摘は論理的に誤りであり、たとえ経済活動以外の要素（たとえば通信技術の発達や交通のグローバル化）を考慮に入れても当を得ていないことが明らかになった。

なぜ金融危機が起きたかについては、2008年度の仁科の報告でも取りあげた。資本主義経済の根

幹である市場メカニズムというシステムには、ショックやパニックを引き起こすリスクが本質的に内在しているとも考えられる。それがグローバリゼーションの進展によって増大するか否かは重大な問題であり、経済学にとっても未解決のテーマであるので、さらに深い分析が必要である。

研究会の第二の目的は、これまで蓄積してきた多様な知見を総合して報告書を作成するために、いかなるアプローチをとるかについて合意を形成することである。議論の成果を統合してポジティブな提言に結びつけるのは簡単ではないが、これまでの蓄積はその可能性を秘めていると考えられる。すくなくとも、グローバリゼーションについて巷間行き渡っている通説や俗説を否定して、あるべき議論の方向を示してきたことは明らかである。それらが望ましいグローバリゼーションへの提言に寄与すると考えられる。3月の研究会では、これまで試みてきた多様なアプローチを再検討して、最終報告書の完成に向けた意見の調整をした。そこでは、各自が論文を執筆するにあたって基本認識とすべき概念を、共通の合意として得ることが出来た。それは、市民社会はこれから進展していくグローバリゼーションを、自らの意思で進めるべきであり、決して受動的に対応してはならないということである。グローバリゼーションは市民社会が進めるものであり、市民社会に与えられているものではないのである。

研究会開催実績：

第1回： 2009年10月23日～24日（於：高等研）

第2回： 2010年3月5日～6日（於：高等研）

#### Achievement:

2006 fiscal year:

The first project seminar was held on 17<sup>th</sup> and 19<sup>th</sup> of November 2006. There were two presentations by Nishina and Maghrebi, both of which focused on the essential properties of globalization as well as the methodological issues to investigate them. Vivid discussion throughout the seminar would help the speakers to develop the research.

2007 fiscal year:

Those presentations contributed a lot to the goal of our project by exploring the essential features of globalization through the fields of each disciplines, namely the theory of corporate finance, political science and business law.

2008 fiscal year:

The first seminar of 2008 was held on 12 and 13 of December. Tekenori Inoki presented his on going study “Globalization and University” which was in the editing process of his new book.

Kaoru Sugihara showed various aspects of “Asia and Africa Trades in Globalization” extracted from his current research supported by his institution as well as government.

The second seminar was held on 13 and 14 of February 2009. Kazuhiko Nishina presented the results explored in “Financial Crisis and Globalization” He emphasized that a number of issues concerning with financial crisis are misguided and distorted by referring to Globalization. Nabil Maghrebi showed the works of 14 century Islamic scholar Ibun Khardun, which explained the positive relationship between globalization and economic development.

2009 fiscal year:

In the final year of the project, we have made a thorough review of the accumulated information, and have discussed on the assertions as well as analyses of members.

We had two presentations, “The financial crisis of Iceland” by Prof. Tanigawa and “Globalization and urban cities” by Prof. Ogawa. Both of them mentioned the current issues in relation with globalization in each research fields. In particular, the financial crisis which occurred during the process of our project have been frequently referred as a problem closely associated with globalization. We have concluded that the conjecture that the crisis was solely caused by globalization is logically incorrect, and that it misses the point even if we take factors other than economic activities into consideration.

Concerning with the crisis, Nishina showed in 2008 presentation that the market mechanism which is the base of capitalism is not free from the intrinsic risk of inviting shock and panic. What is important is whether globalization amplifies that risk or not. This is still an open question.

The second objective is to make a consensus on the methods to publish the final report of project by integrating the accumulated knowledge and analyses. It is a hard work to make a positive proposal by assembling diversified contents, however we think the accumulated results would contribute it. It is at least certain that we have shown the essential features of appropriate approach for the investigation of desired globalization, after clarifying the drawbacks in various notions as well as explanations concerned with globalization. Examining the adequateness of the methodology more at the seminar in March, we have got a consensus concerning with the basic notion underlying the individual paper. It is that the civil society should live with the progress of globalization not passively but positively. Globalization develops by the will of human kind in the civil society.

#### 研究活動総括：

本プロジェクトは「グローバリゼーションの進展が市民社会にいかなる問題を発生させるか、それらに対応して社会が採るべき政策は何か」というテーマを、経済学、政治学、法学、歴史学の観点から共同して検討することである。これまで7回にわたる研究会で合計14の報告を得て、重要な情報と知見を蓄積してきた。わが国におけるこの分野の研究は欧米に比較して相当に遅れているが、本プロジェクトの成果は、将来おこなわれる同種の研究にとって非常に有意義であると思われる。

明治の開国以来わが国の発展がグローバリゼーションとともにあったことは明らかであり、おそらくわが国はグローバリゼーションの進展によって最も大きな便益を得た国のひとつであると考えられる。その国で、グローバリゼーションに関する研究が大幅に遅れているのは理解しがたいことであり、近い将来に多くの研究が進められることを期待したい。一方わが国固有の視点をはなれても、人類社会の将来にとってグローバリゼーションは避けて通ることのできない、むしろ積極的に進めるべきテーマであるから、その研究に貢献することを目的にした本プロジェクトの価値は高く評価されると考えられる。

研究テーマが本質的に多分野の研究者による協力と討論を必要とするのであるから、個別の分野で高い評価を得るような成果を目指すのではなく、複数の分野に適用可能な、一般性の高い指摘や結論を導くことを優先させた。

たとえば、「グローバリゼーションは社会の外から与えられたのではなく、市民社会の発展とともに進展してきた。それゆえ、市民社会に何らかの問題が生じたとき、その原因の全てがグローバリゼーションにあると考えられることはほとんどない。」という認識がある。これは、グローバリゼーションにかかわる研究をする場合に重要な基本認識である。市民社会に現れるさまざまな現象に目を奪われて、グローバリゼーションが市民社会を未知の世界に導き不安と混乱を招く、という類の議論を控えるべきであることを示唆する。グローバリゼーションの進展は市民社会ひいては人類社会の発展とともにあることを忘れてはならない。

金融危機にかんする議論はそのような警告が該当する好例である。経済社会に何らかのショックが生じ、それに対して市場メカニズムが過剰に反応した例は、グローバリゼーションの進展の程度に関わら

ずに存在した。民主主義の形態もそれぞれの国の歴史や文化をふまえて変貌するものである。その程度や速度に対してグローバリゼーションが影響を与えることはあっても決定的な原因になることはない。グローバリゼーションをアメリカ化とみなして、それが文化や宗教において混乱を引き起こす原因であるという主張も誤りである。

とはいえグローバリゼーションが市民社会に多くの未経験の生活を強いていることも否定できない。労働や生産という経済活動はもとより、政治や文化の側面においても、グローバリゼーションの進展が変化の速度や範囲を拡大している可能性は大きい。それらに対してこれまでの研究領域に限定されたアプローチではなく、諸分野による総合的な協力が必要であることを再確認したことも強調しておきたい。最後に、高名な経済学者の言葉を引用しておく。The pro-market, pro-globalization approach is the worst economic policy, except for all the other that have been tried. これが民主主義にかんするチャーチルの有名な言葉を援用していることは明らかであろう。すなわち、民主主義が人類社会の普遍的なシステムになっているのと同様に、グローバリゼーションも市民社会にとって普遍的な構造になっていくと考えられるのである。

### Whole Achievement:

The objective of the project is to explore such issues as what problems the globalization brings to the civil society, and what are the adequate policies to answer them. We have accumulated important and interesting messages from fourteen presentations in four years. Recognizing the fact that the research of this field have been far behind from those of Europe and the United States, we expect the products of project will be helpful for future studies.

It is evident that Japan developed with globalization after the opening of Meiji era, and it has been one of the countries which gained the greatest benefit from globalization. It is a puzzle why we have had few researches on globalization, and it makes us to expect that significant research will emerge in near future. Because it is widely accepted that globalization would continue with the development of human beings, this project which aims to contribute to the basic research on globalization would be highly evaluated.

Since this theme requires collaboration and discussion of researchers of various disciplines, we put a priority in pursuing general message which would be qualified in cross disciplinary fields rather than in acquiring high scores in a single field. For example, we propose that globalization has not been given to the society from somewhere outside the world, but it has evolved with the development of civil society, therefore if any problem occurs in the society, it is hardly true that it has been solely caused by globalization. This is a very important message for the methodology of research concerning with globalization. It suggests that we should refrain from warning the peril and confusion brought about by globalization only to the civil society when we observe new and unknown phenomena. It should be reminded that globalization has evolved with the development of civil society which is the product of human beings.

We find a typical example of this failure in the discussion about the current financial crisis. It is well known that there has been quite a few instances that a market responds excessively to a shock given from outside, regardless of the development of globalization.

Similarly, the form of democracy varies according to the history as well as culture of each country. Globalization may have an influence on the speed and extent to which the form changes, it would never be the essential cause overwhelmingly. It is also incorrect to insist that globalization brings confusion in religion and culture because globalization is the same as Americanization.

But, we do not deny the possibility that globalization forces civil society to have diversified new life

without experience. We agree a large probability that globalization amplifies the speed and extent of change in not only economic activities such as labor and production but in politics and culture. Throughout the project, it should be stressed that we clarified the necessity of collaboration in various disciplines to explore the theme successfully. Finally we quote the sentence related to globalization by an economist. “The pro-market, pro-globalization approach is the worst economic policy, except for all the other that have been tried.” We clearly notice that this has the origin in the famous speech of Winston Churchill. That is to say, globalization is the fundamental structure of civil society similarly as the democracy is the essential system of human beings.

研究成果報告書：

研究プロジェクト終了後、2010年夏の完成を目標とする。

担当：川北副所長

国際高等研究所  
研究プロジェクト「グローバリゼーションと市民社会」  
2007年度第1回研究会（通算第2回）プログラム

開催日時： 2007年6月22日(金) 14:00～17:15  
6月23日(土) 10:00～13:30

開催場所： 国際高等研究所 会議応接室

研究代表者： 仁科 一彦 国際高等研究所特別委員／  
大阪大学理事・副学長／経済学研究科教授

担当所長・副所長： 金森順次郎 所長

出席者： (8人)

研究代表者 仁科 一彦 国際高等研究所特別委員／  
大阪大学理事・副学長／経済学研究科教授  
参加研究者 猪木 武徳 国際日本文化研究センター教授  
(7人) \*\* 小川 有美 立教大学法学部教授  
\*\* 河田 潤一 大阪大学大学院法学研究科教授  
杉原 薫 京都大学東南アジア研究所教授  
\*\* 谷川 寧彦 早稲田大学商学部教授  
ナビル, マグレビ 和歌山大学経済学部准教授  
吉本 健一 大阪大学大学院高等司法研究科教授  
\*\*： スピーカー

プログラム

6月22日(金)

14:00-16:00 報告者：谷川寧彦  
テーマ：「グローバリゼーションの不均一性」  
16:00-16:15 休憩  
16:15-17:15 プロジェクトの計画と運営に関する討議

6月23日(土)

10:00-12:00 報告者：河田潤一  
テーマ：「メンバーシップからシンボリック・アナリストへ—nation of joinersの憂鬱」  
コメンテーター：小川有美  
テーマ：「グローバリゼーションの終焉—大恐慌からの教訓(ジェイムズ)」  
12:00-13:30 総合討論(昼食を伴う)

配布資料

「グローバリゼーションの不均一性」  
「メンバーシップからシンボリック・アナリストへ—nation of joinersの憂鬱」  
「グローバリゼーションの終焉—大恐慌からの教訓(ジェイムズ)」

国際高等研究所  
研究プロジェクト「グローバリゼーションと市民社会」  
2007年度第2回研究会（通算第3回）プログラム

開催日時： 2008年3月21日(金) 14:00～17:15  
3月22日(土) 10:00～13:30

開催場所： 国際高等研究所 セミナー2(2F)

研究代表者： 仁科 一彦 国際高等研究所特別委員／大阪大学大学院経済学研究科教授  
担当所長・副所長： 金森順次郎 所長

出席者： (7人)

研究代表者	仁科 一彦	国際高等研究所特別委員／経済学研究科教授
参加研究者 (6人)	** 小川 有美	立教大学法学部教授
	河田 潤一	大阪大学大学院法学研究科教授
	杉原 薫	京都大学東南アジア研究所教授
	谷川 寧彦	早稲田大学商学部教授
	ナビル, マグレビ	和歌山大学経済学部准教授
	** 吉本 健一	大阪大学大学院高等司法研究科教授
	**:	スピーカー

プログラム

3月21日(金)

14:00～16:00 報告者：吉本 健一  
テーマ：グローバリゼーションと法制度  
16:00～16:15 休憩  
16:15～17:15 プロジェクトの計画と運営に関する討議

3月22日(土)

10:00～12:00 報告者：小川 有美  
テーマ：グローバリゼーション時代の「人の移動」と政治  
ーヨーロッパは「要塞」か？ー  
12:00～13:30 総合討論（昼食を伴う）

配布資料：(公開不可)

- ・グローバリゼーションとコーポレート・ガバナンスの収斂
- ・グローバリゼーション時代の「人の移動」と政治ーヨーロッパは「要塞」か？ー

国際高等研究所  
研究プロジェクト「グローバリゼーションと市民社会」  
2008年度第1回研究会（通算第4回）プログラム

開催日時： 2008年12月12日(金) 14:00～17:30  
12月13日(土) 10:00～13:00

開催場所： 国際高等研究所 セミナー1 (1F)

研究代表者： 仁科 一彦 国際高等研究所特別委員／大阪大学大学院経済学研究科教授  
担当所長・副所長： 金森順次郎 所長

出席者： (7人)

研究代表者	仁科 一彦	国際高等研究所特別委員／大阪大学大学院経済学研究科教授
参加研究者 (6人)	** 猪木 武徳	国際日本文化研究センター所長・教授
	小川 有美	立教大学法学部教授
	河田 潤一	大阪大学大学院法学研究科教授
	** 杉原 薫	京都大学東南アジア研究所教授
	ナビル マグレビ	和歌山大学経済学部教授
	吉本 健一	大阪大学大学院高等司法研究科教授
	**:	スピーカー

プログラム

12月12日(金)

14:00～15:15 プロジェクトの計画と運営に関する討議  
15:15～15:30 休憩  
15:30～17:30 報告者：猪木 武徳  
テーマ：大学とグローバリゼーション

12月13日(土)

10:00～12:00 報告者：杉原 薫  
テーマ：化石資源世界経済の形成と構造  
ーエネルギー効率の改善と環境破壊の200年ー  
12:00～13:00 総合討論（昼食を伴う）

配布資料：(公開不可)

- ・NTT『大学の反省』
- ・化石資源世界経済の形成と構造ーエネルギー効率の改善と環境破壊の200年ー

国際高等研究所  
研究プロジェクト「グローバリゼーションと市民社会」  
2008年度第2回研究会（通算第5回）プログラム

開催日時： 2009年2月13日(金) 14:00～17:15  
2月14日(土) 10:00～13:00

開催場所： 国際高等研究所 セミナー1 (1F)

研究代表者： 仁科 一彦 国際高等研究所特別委員／大阪大学大学院経済学研究科教授  
担当所長・副所長： 金森順次郎 所長

出席者： (4人)

研究代表者 \*\* 仁科 一彦 国際高等研究所特別委員／大阪大学大学院経済学研究科教授  
参加研究者 谷川 寧彦 早稲田大学商学部教授  
(3人) \*\* Nabil MAGHREBI 和歌山大学経済学部教授  
吉本 健一 大阪大学大学院高等司法研究科教授  
\*\*： スピーカー

プログラム (予定)

2月13日(金)

14:00～16:00 報告者：仁科 一彦  
テーマ：金融危機とグローバリゼーション  
16:00～16:15 休憩  
16:15～17:15 プロジェクトの計画と運営に関する討議

2月14日(土)

10:00～12:00 報告者：Nabil MAGHREBI  
テーマ：Perspectives on financial crises and economic globalization  
12:00～13:00 総合討論 (昼食を伴う)

配布資料：(公開不可)

- ・金融危機とグローバリゼーション
- ・Perspectives on financial crises and economic globalization

国際高等研究所  
研究プロジェクト「グローバリゼーションと市民社会」  
2009年度第1回研究会（通算第6回）プログラム

開催日時： 2009年10月23日(金) 14:00～17:15  
10月24日(土) 10:00～13:00

開催場所： 国際高等研究所 セミナー2 (2F)

研究代表者： 仁科 一彦 大阪大学大学院経済学研究科教授  
担当所長・副所長： 川北 稔 副所長

出席者： (6人)

研究代表者 仁科 一彦 大阪大学大学院経済学研究科教授  
参加研究者 \*\* 小川 有美 立教大学法学部教授  
(5人) 河田 潤一 大阪大学大学院法学研究科教授  
\*\* 谷川 寧彦 早稲田大学商学部教授  
ナビル マグレビ 和歌山大学経済学部教授  
吉本 健一 大阪大学大学院高等司法研究科教授  
\*\*： スピーカー

プログラム

10月23日(金)

14:00～16:00 報告者： 小川 有美  
テーマ： グローバリゼーションと都市  
16:00～16:15 休憩  
16:15～17:15 プロジェクト全体に関する討議  
研究成果のとりまとめのための討議

10月24日(土)

10:00～12:00 報告者： 谷川 寧彦  
テーマ： アイスランドの金融危機  
12:00～13:00 総合討論 (昼食を伴う)

配布資料： (公開不可)

- ・都市とグローバリゼーション
- ・ICELANDの金融危機